

ヒ素のはいつた井戸水

伊平屋村我喜屋 西江ユキ(十七歳)

六月の初めごろアメリカが上陸してきたので私たちは部落の我喜屋の人たちと一緒に裏山(賀陽山の麓)に逃げましたが、二、三日したら部落の人たちそろって白旗をあげて山を降りていきました。私が十七、八歳のころです。

捕虜になるとすぐ前泊に移されてそこに二、三日いたと覚えていますがそこから田名に移されて米軍が引揚げていくまではつとそこに居ました。島の人たちは全部田名に集められていましたので、一軒の家に何世帯も詰めこまれて不自由な生活でした。前泊に居たところは焼けのこった二、三軒の家に我喜屋の全部の人を詰めて、寝るところもなかつたぐらいです。座つていらればいい方で床下に寝ているものいました。

田名の場合は親戚の家とか知り合いの家を頼つてお世話になつたわけですが、ここに居たのは半年ぐらいだったと思います。

その間に我喜屋部落は米軍のマリン部隊のキャンプになつていて自由に入りもできませんでした。

C P(米軍任命の民警)とか軍作業へ行つてゐる人たちの話ですと、カヤ葺家とか家畜小屋は全部焼払われてブルドーザーできれいに敷きならされていました。部隊は学校に本部をおいていたそうですが私の家は学校のすぐ隣りにあつたのですからそこまで拡張してありました。

八人も死んでしまつて私ひとりがやつと生きのこつたわけです。体力の弱い者から順に死んでいきました。

初めのうちは、ながいあいだ原因がわからなかつたわけです。島の診療所ではただ皮膚病の薬しか塗つてくれませんでした。部落では悪性梅毒だと何かのあたりだとか言つて、家にも寄りつかないし道ですれ違つても向う側へ逃げていくありました。葬式もごく近い親戚だけで出しました。島の習慣では普通部落全部が参列するんです。

他の家族の者たちは島ではどうにもならなくなつて名護病院に入院しました。そこでも原因是よくわからないが内臓の治療を受けていると少しはよくなつて、それで家へ帰つてくるとまた悪くなるわけです。二回目に入院するともう手のつけられない状態になつてしました。

私は比較的体が強い方でしたから、寝ている病人に御飯をつくつてやつたり看病しておりました。私が本島に出たころは母と合せて二、三名しか残つていませんでした。母は私に向つて、自分たちはもうあきらめているけれどあんただけは生きて、自分の思うように生きて、婚養子でもどつてこの家を継いでくれと遺言のように言つていました。それで私は本島へ出て名護病院にはいつていたわけです。その間に母も他の残りの者も全部死んでしまいました。私は葬式にも出られませんでした。

私はひとりだけ残されて、名護病院、コザ病院、赤十字病院、石川病院と入院しましたが全然原因がわかりませんでした。戦前の家は部落でも二番目の財産家だったんですが田も畑も山も二つの屋敷

私たちの戦前の家は大きなカヤ葺家でしたが母屋も牛小屋も豚小屋も焼き払われて石垣田いもブルで敷きならされました。

マリン部隊が引揚げていつたので我喜屋の人たちはみんな一緒に部落に帰つてきたわけですが家はないからしばらくは前の海端にある製材所の小屋に居て山から木を切りだしてきて親戚どうしでめいの家を建てたわけです。この時、村長さんの相談で、私たちの元の屋敷はどうせ運動場の拡張に使われるから近くの空地と交換しないかと言われてそれで現在の屋敷に家を建てたわけです。この屋敷はもともと空地で井戸が一つだけありました。米軍はここを弾薬集積所に使っていました。

症状があらわれたのは一九四七年ごろからでした。最初に目がチクチク痛でさされるようになつて、涙がでてですね、肌が茶褐色になつてあつちこちに斑点ができるて見られたザマではなかつたですよ。手足がしびれてきて、肝臓と腎臓と心臓が全部やられたんですね。重くなると体ぜんぶから力がぬけて立つことも食事をすることもできずただ寝ころがつてゐるだけです。そのうち腹に水がたまつてふくれあがり死んでいました。家族がぜんぶいっぺんに同じ症状になつてしまひました。

私の家族は父正徳、母モウシ、長男正敏、次男正宏、長女名喜力ネ、その子敏子、次女ヨシ子、その子蒲、それに私を入れて九名おりました。カネの長女敏子が四歳ぐらい。ヨシの長男蒲がまだ一ヶ月ぐらいの赤ん坊でした。

最初に死んだのは父で四七年の十一月ごろでした。二、三ヵ月し

て姉芳子が亡くなり、それからは次々と死んでいき、一年のうちに

も入院費に売り払つてあとには田と畑で六〇〇坪ぐらいしか残つていませんでした。財産が全部なくなるまでは救済も受けられないわけです。

調査員が来たのは八名が死んでしまつて私が石川病院にいたころですが、私の空家に無線技師の松本さんが借りて住んでいたんですね。家じゅう消毒して井戸水も全部汲みだしてからはいつたんですが、この家族にも私たちとまったく同じ症状が現われたんですね。それで名護保健所に水を送つて検査してみたらヒ素がはいついることがわかつたわけです。松本さんの家族は二、三ヵ月ぐらい治療したら退院できました。

私の病名も慢性ヒ素中毒ということになつて治療法も変わりましたが、もう体じゅうに毒がしみこんでいるのでこれ以上よくなることはありませんでした。今でも少し無理をするとすぐ倒れてしまします。鍼を二、三回振つただけで体がフラフラになつてしまふし唇間じゅう起きていることもできません。今は小さな店をもつて子供相手の十円商いをやつています。

去年(昭和四六年)の夏、いつまでも毒のはいつた井戸があると目ざわりだし、思いだしたくもないものですから、人を雇つて埋めさせたんですが、井戸のまわりの石を掘り起こしたら下から空気(鉄製円筒形のポンベ)が二個できました。警察に知らしたのでそれが爆弾ではないし中は空っぽでした。私はこれがヒ素の罐ではないかと思います。ある人に聞いてみたら、ヒ素は米兵の死体に塗るものだそうで引揚げるときいらなくなつたので捨てていつたんだろうと言つっていました。

不法行為 (西江正敏)

請求査定番号 D-10

事件発生期日 一九六七年四月十日

場所 自宅

事件の概要 ヒ素中毒

金額 \$1,065.86

損傷の概要 死亡

請求者署名 [REDACTED]

私は一九四五年八月十六日より一九五二年四月二七日までの間、米国軍隊要員による（死亡）（人身損傷）（財産の損害又は損失）に対する、米国に提出した請求の完全な支払い及び最終的な解決として上記の金額を領収したことを証する。

私は或る請求についてその請求者の為にされた業務に対して代理人、弁護人その他の者に支払われる最高の報酬に対する決定をも含む高等弁務官令第六〇号の関係規定について私は十分承知しております。又、次の事に反する契約があるにもかかわらず私は公法八九と二九六号に基づく請求に関してなされた業務に対して公法八九と二九六号、又琉球列島の現行法規に定められた最高報酬を支払う業務を有するものでない事も十分承知しております。

請求者署名

戦時中の伊平屋

伊平屋村宇田名 比嘉幸雄（二十四歳）

山学校

私は体が弱くて徴兵にはとられなくて、ずっと国民学校の教員をやつておりました。が、あのころは、徴用がひんぱんで、先生方も伊江島の飛行場づくりにひっぱられています。村有船は十・十空襲でやられていますから、サバニ（クリボウ）で行っていました。徴用は何回も交代して、男の人たちはほとんど徴用されています。十・十空襲後は、船の連絡は伊是名と伊平屋と共同で伊福丸をつけていたんですが、最後は伊平屋の我喜屋の港で沈められています。船はリーフと浜の間に泊っていて、乗組員は上陸していて全員無事でした。機銃の掃射で燃えしまったんです。真っ黒いグラマンが低空でやってきて機銃を浴びせていました。村の人たちは、見たこともない飛行機ですからはじめ手を振って迎えていたものです。あの空襲は二月十日だったと覚えています。

伊福丸が沈められてしまうとサバニしかないわけです。サバニは

野浦と島尻に少しぐらいあつただけですが、それを役場の徴兵係が手配して、サバニでもって徴用を伊江島に送っているわけです。徴用されていくと向うの軍の指揮下にはいって働かされるわけです。

サバニで行つてサバニで帰つてきた連中も多いですよ。

ただ、連絡船がなくなると、軍の召集はなくなつて助かつたものもいます。伊礼政敏先生なんか、この学校にいましたが、徴兵がきて、餓別なんかもらってから、もう本島へは行けなくなつたんです。その後も、先生方にも徴用がきたりしたんですが、船はないし、サバニでもグラマンの機銃にねらわれるようになつてからは、もう危くて徴用どころではなくつたわけです。

そのかわり、防衛隊というのができまして、男の先生はみんなこれにはいっています。防衛隊といつても、沖縄本島の、あの防衛隊とは別のものです。ここには友軍はいませんから、軍の命令で動いたわけではなくて、いわば自発的な自衛組織ですね。これを組織したのが、後で話しますが、青年学校の教師をやっていました宮城先生です。宮城というのは変名で、菊池さんという方です。

この防衛隊が中心になって、十・十空襲の後、各所で防空壕を掘るようにしました。それは家族用で、また、二軒ぐらい一緒にとか、もつと大きな集団壕なんかも掘っています。山すそに避難小屋をつくつて、そこに道具や食糧なんかも運搬してありました。これと同時に学校も山に移しました。これは各部落に分散させて山の中に仮校舎をつくったわけです。田名にはもともと尋常二年までの分教場があつて、これは部落のまん中にあつたんですが、空襲が激しくなってきて山の方へ移動させたわけです。前泊寄りのア

私は琉球政府に代つてここに明記された支払いが正当に受権者になされたことを証明する。

伊平屋村収入役

池田松永 印

琉球政府法務局土地課長

米軍上陸

この島で戦争の備えといえば、防衛隊の在郷軍人たちの指揮で、西海岸に散兵壕を掘ったのがあつて、それぐらいのものです。武器

といふのはもつていません。ただ、手榴弾はあつたようです。これはどうも菊池さんなんか、特務教員といわれたゲリラ将校のですね、この人たちが持ってきたんじゃないかと思うんですが、私は聞いただけ見たことはありません。そんな状態で、正規の部隊というのもいないですから、戦闘態勢といった、緊迫した空気はないわけです。

そんなところへ、六月三日ですか、朝の早いうちから艦砲がはじまつたわけですよ。何ごとがはじまつたか、はじめはわからんですよ。何でドロンドロンするんだろと思つて灘難小屋から出て海の方へでみると、まわりの海はもう船でいっぱい、山の上から見ると、島はぐるりとり囲まれているんですよ。これを見て、これは大変だと、これでは絶対見込みはない、それで、指定された避難所へ逃げたわけです。逃げるとき、本とか帳面類は全部土の中に埋めてしましました。あの時は、学校の先生ということがわかると捕虜にされてどこかへつれていかれるんだというデマが流れました。着物も上等のやつは全部しまいこんで、みんなボロを着ていたんですよ。本なんか惜しいことをしました。後から考えるとばからしいと思いましたよ。

米軍は前泊から上陸してきました。二万人ぐらい上陸したそうです。前泊に上陸して、すぐここ（田名）に向つてきたわけです。スピーカーで、「出てこい、出てこい」と言ってくるんです。部落の入口にはずらつと立つていて、こちらが降りていくのを待っているわけです。

親子ちりぢりに山に逃げたのもいたんですが、いくつかの集団に

なつたので、集団ごとに降りようということになつて、降りだしたわけです。リーダーはいなくても、もうダメだからといって、みんな一緒に出ようといつて降りたわけです。一つが降りていくのがこちらからよく見えるわけですから、もうどうにもならんと、あちこちから降りてきたわけです。防衛隊の人が、山づたいに連絡に行つているのもいるんですが、もうそのときは部落民はみんな降伏しているんです。

ここには命令をだす軍がいないし、防衛隊といつても同じ村民ですから、あまり強制するようなことはできないです。集まって協議する場合にも、在郷軍人が中心ではあるんですけど、同じ村民がこうしようと言えば反対できないわけです。上陸のとき、私は上地巡回と一緒に居たんですが、この人は五〇年輩の方です。年輩者だけに無茶なことは言いませんよ。とにかく、あれだけ大がかりな上陸作戦があったわりには、この田名部落はわりと落ちついて、トラブルもあんまりなく、その日のうちにほとんど捕虜になつてしまつたんです。

米軍はこの島を占領するところに大変な設備をこしらえました。前泊に仮飛行場ができて、あの岬のクバ山の上には電波探知機があつて、クマヤーの洞窟は弾薬庫、この道に沿つていつたところにあるヒジャ部落は飲料水取り場になつていました。米軍がこんな島にこれだけの基地をつくったのは本土上陸にそなえていたわけでしょうね。そのころはまだ日本は降伏していないですから。

私は実際にその基地にはいつていったことがありますが、これは偶然そこに迷いこんだわけです。捕虜になると私たちは軍作業をや

米軍がこの島から引揚げていったのはその年の十一月二日だったと思います。それまではずっと戦争中と同じ状態でした。

ゲリラ

宮城先生について、あのころは、村民は先生が特務機関だということは誰も知りませんでした。この人は特別派遣教員といつてきましたが、これを知っているのは校長と私だけでした。私の家に居住つたんです。これは各離島に配置されていて、宮古、八重山あたりでは遭難してきたという名目でおつたそうです。当時は身分は絶対秘密でした。こちらへ来るとときは宮城という名前でしたが、本名は菊池という人です。私と一緒に授業も担当しましたよ。私は五、六年生、先生は高等科をもつていてましたが、授業をやつたのはほんのわずかの間です。防衛隊を組織したのもこの人ですが、教員という名目ですから、表面に立つては全然やつていません。伊是名には平山という大尉が向うからやってきていましたが、これが菊池さんの上官であったようです。両方は連絡をとり合つて、米軍が上陸してから、ゲリラ戦をやる計画だつたそうです。そのため防衛隊も組織したんでしようが、伊是名では実際にゲリラ訓練をやつていたようです。こちらでも、そういう予定だつたでしょが、ここへ来てみると、これではとてもできないとわかったのでしようが、ここへ来て、後になつて、敗残兵たちが斬込みをやろうとするのを、この菊池さんがおさえていましたよ。

この人が島へ来たのは、たしか十九年の十一月か十二月ごろです。捕虜になつていつたのは、翌年の旧正月が終つてからですか

一年以上もここに居たわけです。後できっと、収容所に二、三か月はいって、何ともなく本土に帰されたそうです。

特攻隊

伊井さんと、篠崎さんという将校も私の家に居りました。この二人は特攻隊員です。

あのころの特攻機というのはひじょうにあわれなものでした。私も若くて、こわさもわからんでもよく見物に行つたんですが、特攻機が飛んできてやられるのを五、六回見ましたよ。見ちゃおれないですね、あれは。護衛機も何もつかんで、超低空一点ばかりで一機とか二機とかやってくるんです。いつも西海岸の方でしたね。見てみると、アメリカのグラマンが上の方からおそいかつてくるんですね。こつちは機銃も何も持つてないですよ。ただ、『突つこめ』の態勢で重い爆弾をかかえてブルンブルンとやってくるんです。無敵水のところの高い岩山のところ、あそこから小さく見えてきて、来たかと思うとすぐグラマンにおさえられてしまうんです。逃げまわるだけで、西から東へ島を横ぎていくと、山にいる私たちのところに落きようがバラバラ降つたりするあります。変な言い方ですが、あれはもう戦さではないですね。実に氣の毒なものでした。

私の知っている範囲で、田名の周辺だけでも、特攻隊員の死体が四体あがっていますね。飛行機が撃墜されて、遺体が浜にうちあげられてきたんですよ。防衛隊なんかが埋めたりしましてね。

伊井少尉は、特攻機が撃墜され、それでも幸い命びろいしてこそ篠崎さんとか伊井さんとかは、頭が低くて、この料理でも何でも食べててくれるし、仕事も部落民といつしょにまったく同じように働くし、すっかりみんなの中によくこんでいました。部落の人たちも、自分の息子と同じ位に大事にしていましたよ。だから、二人のことが発覚して、アメリカの兵隊がつれに来たときは、みんな泣き別れしているんですよ。ちょうど旧正月の元旦でしたがね、お酒のせいもあってか、みんな泣いて送つたものです。アメリカにつかまつたら、もうどうなるかわからんと思つていたもんですから。

敗残兵

沖縄本島からここへ逃げこんできた海軍の兵隊たちがいたんですよ。これは、聞いたんですが、名前は教えませんでした。五、六名一緒にでした。この島の出身で、海軍に行つているのがおつて、この人を水先案内にして前泊に着いて、この部落にやつてきたんです。すぐ上方（裏）にはアメリカ兵が駐屯しているもんですから、わかると大変なことになりますから、一晩は床下に寝て、その後も村民が協力してかくまつていたんです。

この人たちは階級もほつきりしませんし、武器は浜に埋めてある

の島に助けられた人です。伊井さんは、飛行機が野市と島尻の間に墜ち落されて、人事不省になっているところを、村民がサバニを渭いでいて、みんなで助けたわけです。

篠崎さんの場合は、ちょうど米軍上陸の前の日ですからよく覚えているんです。上陸が六月三日ですから、落ちたのは二日の夜になりますね。プロペラがブルンブルンと聞えてきたんですが、これは落ちるな、とはつきりわかるんですよ。ものすごい低空で島の上空を二回旋廻しています。後で、これは篠崎さんから直接聞いたんですが、村では煙火管制をやっているんですが、そのころはまだのんびりしているもんですから、上空から見ると明りがチラホラしているわけです。ここには確実に村があるんだと、ここに落ちると住民に迷惑をかけるんだと考へて、三回目の旋廻のときに西側の海に、そこには部落が全然ないですから、その海の方へつつこんだわけです。無敵水の海の方です。うまく不時着をして、荷物なんかも背負つて、暗い海を自力で泳いできました。翌朝、最初に迷ったお爺さんは、標準語が通じないもんだから、篠崎さんをアメリカ兵だと思ったんだそうです。ペコペコおじぎなんかして、助けてくれと言つてゐるわけですね。それから日本の兵隊だということがわかつて、ここから北へ三キロばかりのところに今は廢村になつてゐるヒジャという部落があつたんですが、そこへ連絡に來たわけです。そこでみんなで迎えに行って、新垣さんというところの家に泊めたわけです。

ところが、翌日はもう米軍上陸でしょう。この人は色もとくべつ白いし、足に合う靴も何もないですから、アメリカ兵にみつかつたといったところで、菊池さんは野市からサバニを頼んで報告に行こうとしたんですよ。ところが、まわりはみんなアメリカ兵ですから、どうにも動きがとれないわけです。

そのうち、八月十五日になって、アメリカの兵隊たちが終戦になつたと思います。篠崎さんやら伊井さんなんかが、私の家にいた菊池さんのところに連絡にきて、菊池さんは野市からサバニを頼んで報告に行こうとしたんですよ。ところが、まわりはみんなアメリカ兵ですから、どうにも動きがとれないわけです。

この敗残兵たちがみんな集まつて相談をしているところを私も聞いていました。敗残兵たちがいわく、岬の電波探知機に総員で断続

みをかけよう、といつたわけです。浜に武器はかくしてある、これを使つてやろうと主張したわけです。これに反対したのが菊池さんと伊井さんでした。今そんなことをやれば村民がまきぞになつてしまふ。兵隊がそういうことをやるのは当然だが、村民を犠牲にすることは絶対にいかん、と反対したわけです。

すると、海軍の兵隊たちが言うには、国頭から来た護郷隊がやつたというふうにみせかけて、全員白タスキをかけて斬込みば住民に迷惑は及ばないだろうと、こうなんです。菊池さんはあくまでも反対して、そんな単純にはいかない、今ここでわれわれがそういう行

動にでるならば、島じゅうが報復を受けるにきまつてゐる、と判断したわけです。

菊池さんは、米軍が上陸してきて、住民が投降していくことも何とも言ひませんでした。村民に助けられて、親子のようなつき合いをしていたわけですから、何も命令がましいことは言えなかつたんだと思います。もうどうにもならないんだと、状況判断が正確だつたんだと思います。もし、この連中が斬込みでもやつていたら、この島は大変な犠牲者が出ていたはずですよ。結局は、まったく無抵抗で、これといったトラブルもなく、十一月二日には米軍は引揚げていつてゐるわけです。菊池さんなんかがつれていかれたのは、それからずつと後のことです。

伊平屋島への米軍上陸

伊平屋村宇前泊　末　吉　政　子（十七歳）

私が娘のころのことですから、前泊の部落は今みたいに防潮林などなくて、前はすぐ一面に砂浜になつていて、沖縄本島の北部の島かげが真正面に見わたせるところだつたんです。

六月三日のことですが、その朝の九時から十時の間のことだつたと思います。うちの父（佐久田五郎 六三歳）は朝が早いもんですから、煙で一仕事すませてきて、まだ出かけないうちだつたですから、そういう時間だつたと思います。

何となく外がさわがしいもんだから、私は浜まで出てみたわけで

がないといけない。それで、母は、北側へ逃げようと言つたわけです。前泊から北というと田名部落の方向で海とは反対側になります。しかし、そこにはあまり行つたことがないので自分の壕などないわけです。そしたら、母は、向うには自分の友達がいるから、そこの壕にはいろいろと言つたわけです。自分の壕もあるのにどうして他人の壕に入るのかと、反対したんですが、母は気が強いので、今日はぜつたい北側がいいといつてきかないんです。田名アシマー（十字路）まで来たとき、私は他所の壕などに入るのはいやだからそこで立ちどまつたわけです。すると母は、「戦さ世は親も子も命はめいめいで守らないといけないんだから、あんたが気が向かなかつたら行かんでいい。気が向いたところに行きなさい」そう言つて、自分ひとりで北に向つて走りだしたんです。荷物も持つてないから身軽に走つていけるんですね。私はどうしようかと迷つていていたんですが、ひとりでは心細いので、いやいやながら母の行つた道をゆっくりゆくり歩いていつたんです。

前泊から田名へ行く途中に、上松部落という原屋取があつたんです。そこまで行って、道は下り坂になるんですが、そこを歩いていふときだ、後の方でドカーンというもののすごい音がしたんです。その時は何の音かしらんけど、とにかくそのすごい音が前泊の方でしたもんだから、びっくりして草むらの中に逃げこんだんです。その音は一発だけで、その後は続かないです。後で聞いたんですが、その弾は距離を測るための空砲だつたとか言つていました。一発きりですから、草むらから出て母のところへ走つていきました。道には誰もいないです。母は、おまえ来たか、という様子で一緒になつ

す。そしたら、伊是名島から本島の先（辺戸岬）まで船がぎつしり並んでゐるわけですよ、軍艦が。敵か味方かわからなくて、ただ物珍しくそれを眺めていたんです。浜には幾人かが集まつてそれを眺めているわけですよ。そのなかに、私の従兄で根路鉢実正という占領当時の村長もいるのですが、軍隊の経験のあるこの人までが笑いながらそれを眺めているだけです。誰かが、「もしかしたら敵の船かもしらんぞ。上陸してから降参旗でもあげて降伏したらいいんじゃないか」と言つていましたが、まだ実感が湧いてこないんです。まさか敵の艦隊とは知りませんでしたが、まだ実感が湧いてこないに艦はだんだん近づいてくるんですよ。

私が家へ帰ると、父が、「今日の船はいつもと違うぞ。いちおう避難した方がいいんじゃないか」と言つたんですが、自分はもう少し仕事をやつてくるといつて畑へ行こうとするんです。母（マンチ六十歳）が、「敵の船かもしれないのに、今日ゆうゆうと道から歩いておられるね」と言つておこつたんです。父も、「そうか」と言つて、いちおう牛だけでも避難させておこうということになつて畑の方へ牛をひっぱつていったんです。うちの畑は東側につきだしたアグチャーワー原というところにあって、そこには家族壕も掘つてあるんです。

私たちも避難しようとうことになつたんですが、さて、どちらに避難しようかと迷つたわけです。アグチャーワー原の壕はあまりにも海に近くて危いし、部落の西側にある幸地原には隣組の壕が掘つてあるんですが、そこは人の出はいりがはげしくて、かえつて危いだろう、と母が言うんです。船はどんどん近づいているからこれは急

たんですが、壕のある山手に向つて坂道を歩いていると、突然、前方の田名部落の方からグラマンが低空でやつてきたわけです。田名田ブックワ（田圃）から機銃銃薙射をやりながらまつすぐ私たちに向つてやつてくるんです。機銃の赤い火が見るぐらゐの近さですよ。一機だけパラパラパラとやつてきたんです。弾はちょうど私たちをはずれて通つて、それから後は山ですから、グラマンはずつと高くまで舞い上つて、また、前泊の方でパラパラやりだしました。これが、私たちが戦争というものを体験した最初のできごとです。

「これは大変だ。今の飛行機がまた来ないうちに走りなさい」と母が言つて、母はそのころ六十歳ですが、私と同じような速さで走つて、一目散に母の友達の壕へたりついたんです。友達というのと同じ前泊の人で、上原さんという方です。その家だけどういうわけかほかの部落の人たちは離れて壕を掘つてあつたわけです。そこは松林の中にあって頑丈な壕ができてました。壕には、上原さんの家族のほかに、国民学校の校長をやつてゐる平敷慶勇先生の家族も一緒に避難していました。それで壕の中はいっぱいです。私はことわりもなしに無我夢中で壕の中によびこんだんです。

私たちが壕にとびこんだその直後に、ドカーンと二回目の艦砲がやつきました。田名部落の前の方に田名ダムイ（池）という大きな池があるんですが、その中に落ちたんです。私たちの壕から北へ一〇〇メートル位離れたところです。爆風が吹きこんできて、地響きが壕の中まですごい音をたてたんです。後は、もう思つくひまもないくらい艦砲射撃が続きました。弾は前泊に集中してゐるんですけど、アグチャーワー原のところ

にある前岳という山、ここにまっさきに艦砲を浴びせたわけです。

後で調べてみても、うちの畑から前岳までの一帯がひどくやられて、ここで犠牲になつた人がたくさんいます。そのときは山ばつかりがやられていると思ったんです。前泊の部落にも弾は落ちていたんですね。

これは後でわかつたんですが、アメリカは艦砲を撃ちながら上陸を開始していたわけです。この島には友軍はいませんから、こちらからの反撃は全然ないわけですが、それでもアメリカ兵がずい分やられています。上陸部隊の頭上から味方の艦砲がどんどん落ちてきて、私たちが部落に行つてみたときは、つぶれた戦車が何十台とあちこちにころがっているんです。アメリカ兵の死体もありましたが、これもみんな同士討ちでやられたものです。前泊の海は遠浅になつていますから、そこから上陸してくる間に後から飛んできた弾にやられるわけです。

艦砲はおよそ三時間ばかり続いたと思います。その間はほんとに生きた心地もありませんでした。艦砲が止んでみると、島じゅうが死んでしまったようになります。どうなつただろと、急に心配になつてきました。前泊に敵が上陸しているのもまだわからないんです。

平敷先生はさすがに落つきがあつて、冷静に判断をくだしたんですね。敵が上陸したら、降参するしかないと言つて、フンドシを青竹に結んで、その白旗をあげて、自分から先頭に立つて前泊に向つて歩いていつたんです。一緒に壕にいた十数名が一列になつてついていきました。私はわざと目立たないようにつぎはぎだらけのフク

ターを着ていましたが、それでも母が心配しはじめて、一〇〇メートルばかり行つたころ、「あんたたちみたいな若い女がつかまつたら何をされるかわからんから、私たちが様子をみるまでくれていなさい」と母が言つて、上原さんの娘さんで、私と同じ年の良子さんと二人で山にかくれることになったんです。どこそこと場所をきめで、自分たちが無事だったらかならず迎えに行くからと、それでみんなとは別れたわけです。

二〇〇メートルばかり山にのぼつたころ、下の方から「マサコ、マサコ」と男の声で呼ぶ声がするんです。誰が呼んでいるんだろうと近づいていつたたら、「マサコ、心配はないからおりてこい。みんな無事でいるからおりてこい」と呼んでいるわけです。誰だかわからぬけれど、「ハーハー」と答えておりいくと、そこに部落の青年が現われたわけです。その青年は実は妹のマサコをさがしていましたが、人違ひだつたんです。それはいいんです、その後にアメリカ兵が銃を持つて立つているんです。生れて初めてアメリカ人を見ましたよ。もう逃げられないし、こわくて体がぶるぶる震えるのがわかるんです。その青年が、「何でもないんだよ。部落の人たちはみんな無事でいるよ」と言つてます。こつちの事情を話すと、「今走つていつたらお母さんたちに追いつくはずだから、安心してくださいなさい。私は妹のマサコをさがしにこのアメリカーをつれていくだから」、そういう別れたわけです。

私たちは、走つていくと逃げると思って後から撃たれるおそれがあるからと、気はせりながらゆっくり田園の畔道を歩いていつた

前泊の本部落にさしかかるうとするところから、もう何万人というアメリカの兵隊が、地面も見えないくらいぎつしりといるのがみえてきたんです。戦車やらトラックやら荷物の山やらあつちこつちにあって、島からあふれそうなくらいの大部隊でした。後でアメリカの将校から聞いたことですが、このとき三個師団が上陸してきたんだそうです。

私たちは、わざと髪をバサバサに前にたらして、顔もあげきれないと兵隊の中にはいつていつたのですが、両側に並んでいる兵隊たちが銃の先で髪をかきあげて顔を見ようとするわけです。それでも何ごともなくて、部落の中へはいつていくと、家はほとんど焼けてないから、部落の中央を通つている村道の上にみんな集められていました。そこで親戚知人に逢うごとに、誰が死んだという話になつて、泣くやら、無事を喜び合つやらしていたんですが、不思議なことに、私たちはそこで殺されるものと思っていたんです。一か所に集められたらみな殺しにするんだろとみんながそう思つていたんです。それでもこわいとも何とも思つていらないんです。ただ、どんな殺しかたをするんだろうと、気がかりといえばそんなことぐらいでした。今殺されると思っていてもちつともこわいとは思わなかつたんですね。

私たちが着いて一時間ぐらいして、みんな立たされて歩きだしたわけです。いよいよ殺されるんだと思つていましたが、誰も泣いたり騒いだりはしないですよ。あつちこつち歩かされて、最後には、焼けないで残つていただ根路銘さんの瓦家に入れられたんです。そこ辺りだけ四、五軒家が残つていたわけです。そこが仮りの収容所にされたんですね。少し離れたところにもう一軒南側に名鑑さんという家の瓦家があつたんですが、そこにはベットなんかいれて負傷した住民を収容して上陸してすぐだというのにもうアメリカの軍医が傷の手当をやっていました。そこで死んだ人もかなりいたようです。この野戦病院は後で田名に移されています。

前泊、我喜屋、田名、島尻の住民はぜんぶ前泊に集められて、そこで二日間収容されていました。食べ物は、あつちこつちから焼けのこつち米をかき集めてきて、婦人たちが握り飯をこしらえて全員に配給して食べてもらいました。それから三日目に今度は田名部落に移されて、そこでひとつのかなに何世帯もはいって、およそ六ヶ月間住んでいました。

艦砲が落ちた跡は、木が吹きとばされて、山がむけて土の色が見えるからすぐわかるわけですが、部落の東側の前岳のところから、西側の我喜屋部落との境いにある山のてっぺんまで、こんな狭いところにめちゃくちゃに弾がうちこまれていました。部落の前の海岸から後の山まではわずかの距離で、部落は細長くなっていますからこんな狭いところにあれだけの弾を撃ちまくったわけですから、上陸したアメリカ兵が逆に弾に当つて死んだのも当然だと思います。

部落の人たちの中には、前岳の壕へ逃げた人たちがいちばん犠牲

になっています。船が近づいてから逃げているんですから、逃げる途中に道で艦砲がはじましたわけです。その道端には、髪の毛だとか肉のきれが散って、アダンの木などにも肉片がぶらさがっているありました。

艦砲に追われて

伊平屋村字前泊 佐久田 五郎（六三歳）

アメリカの船が近づいてきたから、牛をさきに避難させておこうと、アグチャーワー原の、うちの畠のところにひいていって、牛は木につないでから、家族のところにひつかえそと道を歩いていたら、その時艦砲がドローンとやつてきました。艦砲がとんでもくるのは、前岳の山をめがけてくるので、もうそのさきには渡れなくなつた。ドロンドロンと自分を追つかけてうちこんでくるようで、まわりには人はいないが、自分ひとりだけ山に逃げるのがせいいっぱいだった。このへんの山は自分の山だからどんどん山の上に登つていったのだが弾はあつちにもこつちにも落ちてくるから、だんだん田名の方に追われていつて、敵は上陸しているから、もう出られなくなつたわけです。その日は山の中で寝て、次の日、田名側の山には水が湧くところがあるから、水を頼つて山を越えて山を越えていったら、田名部落の方に人が歩いているのが見えるから、もしかしたら島の人たちも生きているのかもしれないと思つて、そのときは艦砲は止んでいるから、また山を逆に登つていったわけです。アメリカの山羊日は夜

いっているか何がはいっているかわからんので、もううだりもらつて食べはしなかつた。
番兵がついで、アメリカ兵の間に寝かされて、一晩はそこで泊められたわけです。

次の朝になつたら、兵舎にいる兵隊が木の先に赤い布をつけたものをもつてきて、この旗を持つて部落の方へ行けど、手まねでやるわけですよ。後から撃ち殺すんだろうと思つていて、牛は木につないでから、自分の畠のところを通つて、前岳のところまで行くと、そこにもまたアメリカたちがいて、いろいろいたずらを言つてますが、もちろん何言つていてるかわからんですよ。そこまできたら、また前岳のてつへんを指でさして、この旗を持つて向うへ行けといふわけです。山の上にも兵舎ができているわけです。また、わざわざ山の上に登つていつたら、そこからは前泊の部落が見えるわけですよ。もう、部落は跡かたもなくなつて、アメリカ兵がうようよしているわけですよ。

そのアメリカーが、また手まねで部落の方へ行きなさいというわけです。部落の様子を見せるためにわざわざ山の上に登らせたかもわからん。私はアメリカーにおじぎをして、山を降りて、部落のところへ歩いていった。途中の道は艦砲で穴だらけで、部落の家もみんな吹つとんでいたんですよ。

私が戻つてきただら、家族の者たちは、もう私はいないものと思うていたので、親子だき合つて泣きましたよ。三日目の朝で、その日のうちに、捕虜は田名部落の方に移されました。

になつたら物が見えないと言つて、暗くなつてから部落に戻ろうと考えて、アグチャーワー原の山まできて、松の木に登つて畠の方を見たら、アメリカー兵がグワサグワサいて、兵舎がたつてゐるわけです。

日が暮れるのを待つて、今ごろからは物が見えないだろうからと思つて、木に登つてみたら、まだ夕方だから、下にいるアメリカーにみつかつてしまつて、鉄砲を撃つてきたわけです。まだ見えるんだなと思つて、また山のてつへんにひつ返して、そこで真暗くなつたから、もういいだらうと思つて降りてきました。

谷間づたいに降りてきて、もうやがてで畠に出ようとするとき、木の葉をガサガサするのでわかつたのか、アメリカーにみつかつてしまつた。まさか山の中までさがしてくるとは思わなかつたから、ゆだんして歩いているところを向うにさきにみつけられてしまつたわけです。ワーッという声がしてびっくりして逃げようとしたら、弾を撃つてきた。もうだめだから、詫びた方がいいと思って、手をふたつあげて、田んぼの畔道に立つて、アメリカーのところに降りていつたわけです。

近寄つていつたら、ひとりのアメリカーが両手をつかんで、もうひとりのアメリカーがつけているフクター（ぼる着）のあつちこつちをさぐつた。もう殺されてもどうされてもかまわないとあきらめでなすがままにされてしまいましたよ。

兵舎のところにつれていかれたら、もう、たくさんの中のアメリカーがいるわけですよ。そこにつれていかれてひとりだけ座らされて、そしたら、食べなさいといつていろんなものをとらせるが、毒がは

女子青年団員

伊平屋村字田名 名嘉のぶ子（十七歳）

私、高等二年を卒業して那覇の洋裁学校に行つてました。防空演習は那覇でやつて、もう戦さが近づいてきたからと、島へ帰つてきました。十・十空襲の前です。その時は、村の船はまだ通つてましたから。

あの時、私は十七ですから、字の青年団にはいつていました。青年団といつても、男の人はあんまり残つていませんでしたよ。字の青年団から三名四名、志願して沖縄本島に行きましたが、その人たちはとうとう帰つてしまませんでした。

青年団はとくに戦闘訓練というものはなくて、この島に戦争がくるとは思つていませんでしたから、もっぱら食糧増産だと言つて、毎日畠でついていました。年が明けてからは、ときどきアメリカの飛行機が飛んできて、そのたんびに田んぼの溝にとびこんだりして、ショウジョウヒヤヒヤしていましたが、さいわい田名は空襲は受けなかつたです。

沖縄に敵が上陸してきたと聞いてからも、私たち戦争のことは何にも知らなくて、わりと呑氣に暮してましたよ。だから、アメリカが前泊に上陸してきた時は、ほんとにびっくりしました。六月三日ですか、上陸した日は。警防団の人が避難命令をして歩いたんですよ。朝がたからおかしいとは思つてましたですが、まさか上陸するとは思わなかつた。敵が上陸した、早く避難しなさい、

とふれて歩いたから、裏山の壕にいたん逃げたんですよ。部落のすぐ裏にめいめい壕が掘ってあったから、そこへ逃げたんですよ。

ところが、アメリカがもうそこまで来ている、と言うから、もつと山の上に逃げたわけです。田名からは前泊に上陸するのを見えませんから、ドロンドロンという艦砲の音におどろいて、とにかく敵がくる反対側の方に逃げたわけです。山の高いところへ登つて、反対側の、西側の方へかくれていたわけです。そこは壕もなくて、水も食べ物もないから、ただいつときの避難だったわけです。

私たち、とくに若い女は、アメリカにつかまつたら何されるかわからないので、女子青年団員は、四、五名ぐらい一緒にかたまって、いちばん山の奥にかくれていました。うちのお母さんは、姉の子どもたちをつれて、部落裏の壕にかくれていたんですが、山には登れないといって、そのまま壕に残つていたんです。みんなが山の奥に逃げるときに、お母さんとははぐれてしまつて、どうなつたかもわからなくなつたんです。

上陸地の前泊は、ほとんど艦砲でやられてしまつて、家も四、五軒ぐらいしか残つていないありますでしたが、この田名には手をつけないでいました。ここには、捕虜になつた人を収容したり、アメリカの将校たちの宿舎になりましたから、そのまま残しておいたのだと思います。

次の日には、部落のところまで戦車がきて、スピーカーで山に向つて「降りてこい」と呼びかけていました。その声は、村の人の声でしたから、みんな安心して降りつていつたんですよ。

でも、私たち女子青年団は何をされるかわからないので、こわ

くて降りていかないんです。とうとういちばん最後までとり残されてしまいました。

もう艦砲の音も止んで、みんな全滅したかと思っていました。私たちのいるところから、西海岸がまつすぐ見えるんですよ。その海岸を、犬をつれたアメリカ兵がゆっくり歩いていくのが見えるんです。もう戦争は終つたとわかるんですが、こわくて降りていけないです。

夜は部落の方へ降りていって、誰もいない家の壕から米を盗みだして、それを食べながら昼間はじつと山の中へかくれていました。部落は空っぽになつていて、みんなどこかへつれていかれているわけです。私たちはますます心細くなつて、どうしようか、どうしようかと言つていたんですが、でも、自決しようという者はなかつたですね。手榴弾なんかないし、私たちはそういう訓練も受けていませんから、死のうという気持ははじめからなかつたんです。

三日目の日に、部落の人が私たちをさがしにきました。「アメリカは何もしない。安心して出てきなさい」と言うから、それで私たちも安心して四、五名一緒になつて降りてきました。着物はわざつとボロボロの汚いものをつけて、顔に泥を塗つて、髪もバササにして、目立たないようにして部落へ降りていつたんです。

田名と前泊の間に戦車がとまって検問所みたいのができていました。顔をかくして、そこを通り抜けていつたら、前泊はぜんぶ焼け野原になつていて、四、五軒のこつている家に、村ちゅうの人たちが集められているわけです。そこで、生きているかどうかわからなかつたお母さんが元氣で迎えてきて、私たち、はじめて手をとり合つて笑えるようになったんです。

伊是名の戦時状況

伊是名村字伊是名 東 江 安 永（四二歳）

私は区長をやつしていましたが、伊江島とか津嘉山（南風原村）などに島から徵用を送るといつて、この割当が大変でした。当時、伊是名村全体で六、五〇〇名、七三〇戸で、そのうち、うちの部落が二四〇戸あつて二、四〇〇人ですから、いちばん大きな部落で、村役場、郵便局などもこつちにありました。部落の男は人口の半分とみても千名こえるわけですが、この男たちはぜんぶ徵用にとられていますよ。六五歳以下の男だったら村長であるうが議員であろうがみんな一か月ずつ労務を行つています。一回の労務班は多いとき二〇〇名ぐらい行つていますね。私は区長だからはずされていました。

それから稼作りですね。部落を班に分けて、十三班までありますたが、各班で、共同作業をやって、各屋敷に一つとか、各班で一つとか、壕をつくっていました。この島は木が少ないから、海端からアダンの幹を切り出してきて、穴の上にこれをかぶせてつくつたわけですが、これは実際には役に立たなかつたですよ。

この島では戦争にそなえて防衛隊をつくつて、島における在郷軍人とか青年団とかが指揮して、夜も昼も訓練して上陸にそなえていました。竹槍訓練とか消火訓練とか、その程度のものでした。焼夷弾が落ちてきて一軒でも燃えたら隣組で井戸から水を汲んで少しでも消そうというわけです。

こつちには病院も医者もいないですから、ケガでもすると、三五度ぐらいの酒で傷口をふいて仮包帯をするのがせいいっぱいでしました。それで、酒は、警防團長とか巡査が、戦前店をやつていたところから没収して、非常用として一斗いりの二かめに封じて元区長の名嘉さんの家にたくわえてありました。これだけが薬の代用でした。ほかには何もありませんでしたね。

食糧のたくわえは供出米のモミがあつたわけです。伊福丸が伊平屋の我喜屋で沈められてからは、もう送り出すことができなくなつて、それを全部村の農業技術員が検査して封印してあるのを、村の戦さのためのたくわえとして部落内の五、六か所に分散して貯えておきました。農業共同組合の事務所にも保管してありました。これをみんなに配給して消費したわけです。

十・十空襲はちょうど防空壕づくりをやつているときでしたね。お屋を食べるちょっと前だったから十二時ちょっと過ぎだったと思います。ここへ来たのは一機だけです。その時は仲田の港がねらわれただけでこちらは何ともなかつたです。伊福丸がちょうど肥料を積んでいるところをやられて、このときは大丈夫だったが、その後無理して二航海ぐらい往來して、それで伊平屋は安全だろうと思つて我喜屋にとまつているところを二月の空襲で向うで沈められたわけです。この伊福丸が伊是名と伊平屋のただ一つの船ですから、これが沈まされてからは本島への船はなくなつて、あとはサバニ（クリ丸）だけです。

十・十のときは学校の門のすぐ側に大きな爆弾も落しています。それが不発して、土のなかにそのまま埋れておったのを、四月ごろ

本部半島から兵隊がきて、これを掘りだし、伊是名城の向うの砂原で爆破させております。空襲のときは、ちょうど学校はお昼休みで、子供たちが運動場でワイワイしているところへ落ちてきたから、あれが爆発していたら大変なことになつただろうと思います。飛行機はたつた一機で、後から来はしないかと心配していたが、それきり来ないです。これが伊是名の戦争のはじまりです。

十・十空襲のときは、朝から国頭方面で飛行機がまわつて煙があるのも見えよつたんですが、軍から警戒警報も何もないから、日本軍の演習だと思って見ておつたわけです。

十・十空襲のあと年が明けてからは、みんな山の壕にちりぢりに避難して、昼間は部落の中には人はひとりもいないです。昼はかかるで、夜は月夜になると田畠にて、働いて食糧確保をやっていました。山の中には各戸思い思いになるべくひと所にかたまらないように、壕を掘つてあつたわけです。そのころは本島からは何の連絡もなくて、島のなかだけで自分らで考えて、役場や学校の先生方が指導してやつたわけです。

はじめのうちは屋敷内の壕に家財道具をいれて、その中にかくれるつもりでいたのですが、一月空襲でそこでは危いとわかつて山の中にかくれたわけです。体一貫、家族の食べるものだけを持って逃げていつて、向うでは煙を立てるのはいかんといって、夜のうちに部落へおりてきて、ニクブク（薬製の敷物）でまわりを囲んで、そこで煮炊きして山へ持つていつたんです。山の間に泉があつて、水に不自由はしなかつたが、その年は雨はどんどん切れ目なしに降つてきて、壕の中は泥だらけで、ノミやシラミにくいちらされて、

衛生状態はほんとに悪かったです。私は区長として各壕を廻り歩いていたから壕の中ではほとんど寝なかつたといつていいですよ。二、三時間ぐらいは寝ていました。さいわい重病人はでなかつたですよ。この島に昔からあるクサフルイ（フィラリア）はよく出来ましたがこれで死んだのはいません。戦争でみんな精をだしているから病気には強かつただろうといつてました。山の中でも、この島にはハブはないから、たまにムカデに刺されるぐらいでした。

ただ、悪い宣伝がはやつて子供が泣いたら敵の電波探知機に知れて爆弾でやられるとか、犬のなき声も大変なことになるといつて、誰が言い出したかそんなデマが流れて、子供をもつている親なんかは心配して、みんな臆病心にとらわれていました。私なども、最後には頭のがぼせるほど心配ばかりして、ゆっくり休むひまもなかつたです。子供が泣くと危いというデマに対して私の考えは、戦争をしている飛行機がわざわざ子供の泣き声までつかまえるか疑問でした。

この部落がやられたのは、一月空襲、二月空襲、三月空襲のときですね。他部落では弾にあたつてやられたのはほとんどないですよ。ここだけは機銃掃射がはげしかつたですよ。焼夷弾も落されています。爆弾はここだけで五〇キロ弾から四〇〇キロ弾まで、少なくとも一〇〇発以上は落ちているはずです。この家から十五メートル離れたところにも落ちていますが、このときはちょうど私は家にいたわけですが、家の東側の戸は全部吹きとばされてしまつてですね、隣りと、その隣りの石垣までみんな粉ごなになつてしましました。屋根も東側と縁側は瓦一枚もなくなつてました。今でも

柱とかハリとかに破片が残っています。この部落は砂地ですから、そのため被害は少なかつたですが、焼けた家は三三戸だったと思します。焼けたのは焼夷弾でやられたのもありますが、えい光弾ですね、あれは先がつき刺つたらそこから花火みたいに火が吹きだしてくるんですよ。爆弾の破片もこわくて、焼けた破片が四方に飛び散つて舞うんですね。家が燃えて、逃げおくれて焼け死んだのもいます。空襲で焼けたのは伊是名だけですから、各部落に割り当てをして、村有林を切つてきて、仲田が三戸つくつてくれる、諸見が二戸つくつてくれる、といふうに、村じゅうで復旧作業をやつてくれたもんです。

空襲の被害といえば、この部落の向いに屋那堀という島があるんです。そこに、ソテツの澱粉をつくる工場があつたんです。村で唯一の工場ですが、これが兵舎にまちがえられたのか空襲され、二名死んでいますよ。その島の後にシーヌ森という砂地があるんですけど、そこに在郷軍人、防衛隊、青年団などが渡つていて、わざわざ塹壕を掘つてあるんですが、そこもねらわれたようです。屋那堀はもともと無人島ですが、澱粉工場の労務者が本島や伊江島から来ていたわけです。工場は焼けてしましました。

ここで戦争を見たというのは、伊江島に上陸したときと特攻機ですね。伊江島に上陸したとき、艦砲の音がドロンドロンと鳴ると、こちの土地までグラグラするぐらい響いたもんですよ。家も土地も動きよつたです。

いつごろだったか、空襲の心配はないだらうと思って、家内の兄さんと二人で、牛の草でも取つてこようと言つて屋那堀島に渡つて

この部落に不時着して助けられている特攻隊員もおりますよ。その前には、名嘉（宮太郎）先生と一緒に部落の西側の山に登つていたときに、すぐ目の前で空中戦をやつてゐるのを見ました。日本の飛行機は一〇機から二〇機ぐらい北の方からやってきて、敵の飛行機は三〇機から四〇機ぐらいでしたが、ちょうどこの島の上でぶつつかつてしまつて、はげしい空中戦になつたわけです。日本の飛行機は鹿屋から飛んでくるんだそうですが、アメリカの飛行機もこの辺で警戒して待つてゐるわけですね。ここはひじょうに危険なところであつたわけです。日本の飛行機はすぐグラマンにとりかこまれてしまつたわけです。アメリカの方が早かつたですね。日本の飛行機はすぐつかまつて、パッと燃えたかと思うと海につつこんでいるんです。空中戦ではアメリカのグラマンもやられていましたが、日本のは全滅です。最後に残つたのはアメリカの飛行機が十二機だけでした。これは名嘉先生とふたりで数えたからはつきりしているんですよ。

の飛行士から聞いたんですが、彼らは鹿屋から飛び立つて、屋那霸島の後（南）の軍艦をめがけて飛んでいたんですが、敵の戦闘機にはさみうちになつて、追われ追われて、機銃もうちつくしてしまつて、もうどうしようもないから、この浜崎という海岸につつこんできたわけです。海岸につつこんで車輪を上にしてひっくりかえつているところを部落の人みつけられて、自分では出られないから、「友軍だ、助けてくれ」と言つて、それで部落の人たちが飛行機を持ち上げて助けてあげたわけです。少しやけどをしていたが大したことになかつたです。これは一人乗りの戦闘機でしたよ。この飛行士はこの部落で養生して元気になつたんですが、もう軍には帰れないからと云つて、民家の農作業なんか手伝つて住みついて、方言も覚えておつたようです。島には本島から逃げてきた兵隊も何名かおりました。

ときどき、本島の敗残兵がクリークを盗んでこちらに渡つてきましたよ。与論や沖永良部に連絡をやりに行くんだと言つて、後でわかつたんですが、これはウソを言つていたわけです。彼らの言うことを信じて、村の婦人会などがめんどうをみていましたが、そのうち各個人の家に入れて、畠仕事など加勢させて、一年ぐらいこの部落おりました。昔からこの島は、伊平屋スーター（やりくり）と言われるぐらいに、自分らは食べなくても旅人には何でも持たせてやる性質があつたわけです。この島の人たちは昔から旅先で苦労している者が多いですから、他所の人を親切にもてなす習慣があつたわけです。

戦争が敗けたとわかつてから、この敗残兵は与論に逃げています

いると見込んで、夜のよなかに内花の方に上陸してきて、水陸両用戦車でこの部落にもやつてきました。武装しているもんだから私はびっくりしたんですよ。部落の人全部を今のお店の東側の広っぽに集めて、宣撫班が、日本はもう降伏して安全だから安心して働きなさい、と言つて、それで私らも混乱しないで言う通りにしたわけです。この部隊の悪い兵隊連中はこの夜と次の日屋じゅう部落じゅうを荒しまわつて歩いていました。被書といつては別になかつたですが、女たちに悪いことをしたという噂は聞いていましたが、それはそのまま泣き寝入りになつたんですね。

伊是名では戦争はなかつたよ、と一口ではそうでしょう。今ではなおそう言うでしょ。しかし、やっぱり戦争の苦勞というのは口では言えないほどいろいろありましたよ。

日本兵の住民殺害

伊是名村宇内花 喜名政和（十三歳）

この記録は被害者喜名政昭（当時四二歳）氏の遺族の証言を中心匿名希望の三名の証言も補足して整理したものである。

喜名政昭は私の義兄にあたりますが喜名主といつて伊是名の人はよく知っている人でした。もともとは本部備瀬崎の新里の人で、そこには家もあつて妻子もいたそうです。政昭はバクロー（家畜商）

よ。ここから与論までは十三里あるんですが、与論まで渡れば、あとは永良部、徳之島、奄美と逃げていけるわけです。そのころの舟はみんな權でこぐ舟ですよ。夜に、諸見から舟を出したわけですが婦人会が食糧を持たしてやつたり、村じゅうでめんどをみて送り出しました。

伊是名が空襲を受けたのは四月が最後です。四月末からは、本島の方から日本に向つてアメリカの爆撃機が飛んでいくのが見えました。嘉手納から飛び立った飛行機は、ちょうどこの上空で編隊を組んでから、何十機と日本に向つていくのが手にとるように見えるわけですよ。そういう状況を私は山の上の壕からながめていたんです。

伊平屋に米軍が上陸したときも、この島からよく見えましたよ。国頭のさきからずつと南の方まで大小の軍艦が四〇〇隻ぐらいですか、四列、五列に並んで、ずつといっぱいですよ。この島の人も我喜屋の妻のターミットウというところに壕を掘つてかくれていたようですが、アメリカが上陸してその夜のうちにクリークで逃げてきて、この連中から聞いたわけですが、島の中が小さいものですから撃つてくる艦砲は向う側の海に落ちてしまつたそうです。前泊の後にある虎頭岩にどんどんうつてくるわけですが、向うは前がすぐ海ですから、上陸地点の浜にも弾はどんどん落ちてきて、それで上陸していくアメリカ兵が倒されたそうです。戦後になっても上陸用舟艇が十五、六隻こわれたのが捨ててありましたよ。

島にアメリカ兵がはじめてやってきたのは八月十五日もずつと過ぎて、その年の十月ごろになつてましたと思います。ここに敗残兵が

をやつて牛や豚を買ひに伊是名、伊平屋を歩きまわつていましたから、その父親も一緒に、内花に住んでいたわけです。父親というのは私の父になるわけですが、内花に土地を賣い私の母を後妻にもらつていましたから、親子内花に住んでいたわけです。子の政昭も、ここで二号さんをもらって子供が二人もできつてました。仲田のゴザ（三九歳）さんというのが二号さんで、本人は政昭に本妻がいるのを知らなかつたわけです。政昭さんは牛馬を買ひに島々を渡り歩いていましたから、本部へ行つたり伊是名へ来たり、また伊平屋や野甫などにも渡つたりしていました。そのため自分でサバニ（クリーク）ももつていました。こうして、戦争中もわりと自由に歩きまわつていたので、そのためスペイという嫌疑をかけられて敗残兵に殺されたわけです。

敗残兵というのは、本島の明治山から逃げて、サバニで伊是名に渡つてきました連中で、伊是名（部落）とか諸見とかに泊りこんでいました。諸見の校長先生の家に七、八名、源三家にも何名か居りました。この連中の言い分では、伊平屋に上陸しているアメリカ軍をやつけるために待機するんだということでしたから、戦時中のことで軍に協力しないわけにはいかないし、島の人たちは戦争の模様は何も知りませんでしたから、油絹戦が終つたのも知らずに、敗残兵を大事にもてなしていませんでした。彼らの言うことを信用して、正規の部隊だと思っていました。各部落の大きな家の一番座に寝泊りして、米も各家から持ち寄つて、毎日ごちそうしていました。この敗残兵の隊長格は平山大尉という人で平山隊長と呼んでいました。これが喜名政昭に直接手をくだした人です。

敗残兵のほかに、特務機関の西村という者がいました。学校の先生をやりながら青年団を組織して、斬込みとかゲリラ戦の訓練をやつしていました。また、各部落に防衛隊をつくるっていましたが、防衛隊もこの西村とか平山とかの命令には従わないわけにはいきませんでした。この西村はこの女と結婚して子供もできていましたが、本人は最後にクリ舟で与論島に逃げていきました。その後のことはわかつていません。

生良巡査というのがいて、これは伊計島の出身ですが駐在できていたわけです。この巡査がまたこわい存在で、空襲中でも壕をまわって歩きよったですが、いつも住民の動きに目を光させていたわけです。生良巡査はいつも敗残兵とびったりくついて、住民に直接命令するのはこの男でした。

この敗残兵の集団がこの島で罪もない人をだいぶ殺しています。飛行機がおとされて捕虜になつたアメリカ兵を三名も殺害しています。このときは、西村は英語がしゃべれるので、彼が直接ピストルで殺したようです。

このほかに、奄美大島から買つてこられた漁師の傭い子が三名いたが、この子供たちもスパイをやるおそれがあるといって、少なくとも二人は殺されています。一人は殺されることを知つて、具志川島に潮の流れの早いところを泳いで行つて、かくれていたそうですが、後から追つかけていつて日本刀で首を斬り落したそうです。これはオーサカーというあだ名で十七、八ぐらいの青年でした。ほかに伊是名（部落）の西の浜で殺された十五、六歳の少年もいます。

喜名政昭が殺されたときはこうです。殺されたのは旧の六月

二十五日（新暦八月二日）ですからそのときは伊平屋にはアメリカが上陸しておつて、沖縄戦も終つていたわけです。だが、この島にはアメリカは来ないし、敗残兵ががんばっているもんだから戦争が終つていることは知らないわけです。政昭はサバニで伊平屋にも野甫にも行つたりきたりしているから向うの様子はわかるわけです。アメリカ兵が、戦争は終つたよ、というのを聞いて、それを伊是名の兵隊たちに言つても信じてくれないわけです。そのころから、喜名主はアメリカのスパイだといううわさが流れました。

政昭は伊平屋に渡るとき日の丸の旗を持っていて、それをいろいろな品物と交換してくるわけです。アメリカ兵はそれを喜ぶから何でもかえてくれるわけです。ゴザさんとの間にできた子供が二人おりましたが、子供たちにアメリカ製の作業服を着せたり、また、日の丸と弾薬と交換して、その火薬で魚をとつたりしていました。本人は戦争はもう終つたと思っているから平気だったんでしようが、敗残兵から見ると、自分たちのことがバレると危いと思つたわがでしようね。とにかく、喜名主はスパイだといううわさが流れたわけです。

殺されたときの模様はこうです。そのとき、政昭は伊平屋に貸した金があるからそれを取り立てにひとりでサバニを漕いで向うへ渡つていました。内花の家には父親が病氣で寝ていました。そのときに、兵隊たちは政昭を殺す段取りをしていました。こちらから三、四回伊平屋に手紙を持たせて、父親が重病だからすぐ来いとさそいだしたわけです。生良巡査が内花にやつてきて、内花の防衛隊は全員集合させて浜の方で見張りをやらされたわけです。

私（政昭）は、この様子を見て、何とか兄貴にこれを知らせようと、浜のアダン葉の中にかくれて見張っていたわけです。兄貴に伊平屋にひつ返せと知らせようと思つてですね。ところが、かくれているところを生良巡査にみつかつてしまつて、諸見にひっぱつてかれ、さんざんなぐられて半殺しにされ、「おまえもぐるだから殺してやる」と、今にも殺されるところだったんですが、ちょうど敗残兵のなかに玉城トッコウという瀬底島出身の人がいて、同じ本部の人だからときどき家にも遊びに来ていたんですけど、この人が私を助けてくれたわけです。だから、私は兄貴が殺される現場は見てないわけですが、内花の防衛隊の人はみんな目の前で殺されるのを見ています。

内花のSさん（当時三三歳）の話はこうです。防衛隊は浜に出る道の側に全員集合して遠くから見ていたわけですが、喜名主の舟がやってきて、浅瀬のところに降りたところで、平山隊長が二人の部下をつれて近づいていて何か言つたかと思うとビンタをバンバン張つたたそです。政昭は、とにかくちょっとだけでも父親に会わせてくれと言つたそうですが、「そんなことがあるか」ととなりつけたそうです。政昭がよろよろしながら浜の方へ逃げようとする以後から、平山隊長がピストルを抜いて撃つたわけです。それで倒れたんですが、まだ死ないので今度は前からも一発うちこんで、それで死んでしまつたそうです。口から血を流して、とても見られたまではなかつたそうです。

政昭が死んだもんだから、後の始末は防衛隊に責任を負わせて、兵隊たちは引揚げていつたそうです。防衛隊は死体をかついでクリ

舟に乗せて、今の東洋牧場のある河原まで運んでいくつて、そこに穴を掘つて埋めたそうです。遺骨は後でうちの家族が掘りに行つたらちゃんとそこにありました。敗残兵たちは人を殺すとその河原に埋めるようにしてました。具志川島で殺された大島の子供もここに運んで埋めたそうですが、ずっと後になつて傭い主の爺さんが遺骨をさがしに行くといふので私も一緒に行つたんですが、これはとうとうみつかりませんでした。

殺されたのは夕方のころですが、その日の夜中に、生良巡査が仲田のゴザさんの家に踏みこんでいて、スパイの子供は生かしておけないと言つて、數え十七になる長男と三ツになる妹を外にひきすり出して殺そうとしたそうです。ゴザさんは、「殺すなら私も一緒にも殺せ」と、ほんとに死ぬ覚悟で、裸になつて子供たちをかばつたものだから、とうとう殺されずにすみました。

やがて、伊是名出身の帰還兵たちが島に帰つてきて、この連中がただの敗残兵だということがわかつたわけです。「こいつらに飯を食わせるぐらいなら豚に食わした方がいい。こいつらはころして（いたみつけること）しまえ」と怒つたんです。

そこで、敗残兵たちも立場が悪くなつて、ほんとに戦争が終つたかどうか、与論までクリ舟で行つて聞いてみたら、ほんとに戦争が終つていることがわかつたわけです。そのときは、もう降伏したずっと後だつたわけです。それで、平山も西村もほかの敗残兵たちもクリ舟に乗つて与論に逃げていつたわけです。まだ生きているかもしれないが、戦後この連中は一度も島に来たことがありません。あれだけ親切にもてなしてやつたのに手紙一通よこしてはきません。

私の父は、政昭が殺された話を防衛隊の人たちから聞いて、そのショックのためか、一〇〇日後には自分も後を追うように死んでしまいました。

敗残兵による米兵捕虜殺害

伊是名国民学校教員（当時）西 銘 活 蔵

あれは二十年の五月か六月ごろでしたか、南部はまだ戦っていて、戦争のさなかったです。本部の嘉津宇岳から流れてきた敗残兵や、友軍の飛行機で墜落したのが救助されて、その搭乗員の人たち、また特務の西村軍曹（本名馬場）、そういう人たちが七、八名ぐらいこの島にいたはずです。菊池中尉とか平山大尉とか、そのグループにはいっていたわけです。

馬場（西村）軍曹はそのときゲリラ戦を指導する特務教員ですが、青年学校の訓練教師として配置されていたわけですが、村の幹部たちさえそんな事情はわからんわけです。馬場軍曹は、青年学校の上級生を各字から何名ずつか集めて、雷管とか、手榴弾の投げ方とか教えていたわけです。彼の言い分は、アメリカが上陸してきたら今ある建物を利用するであろうから、昼間は山の中に隠れていて、夜はこっそりぬけだして、そういった建物の床の下に潜伏して爆破すると、そういう訓練をしたわけです。私の義兄は船長でしたが、馬場軍曹はそんな任務で来ているんだと話したら、あの船長、全然相手にしないですよ、笑ってですね。

内地に送りかえしていますよ。この送りだしの後で、私は兼本正順というペルー帰りの人達に逢ったんです。この人は船乗りですが、他に兵事主任の城間久栄さんとかが伊平屋渡（海の難所）のまんなかで船もろとも捕虜になってしまったんです。この人がアメリカの警備艇のパイロットをして伊平屋にいるわけですよ。この兼本さんが私に、「そちらに西村という軍曹が教員をしているだろう。これをすぐやめさせないと困ったことになるよ」といつたんです。私はよくわからないから、「なぜそんなことをおっしゃいますか」ときくと、実はアメリカの情報機関からおって調査に来るはずだから、来るまえにやめさせた方がいいと言うわけです。私はすぐ兼本さんと一緒に学校へ行つて西銘校長に話したんです。ちょうどその日は二十一年の一月になっていますが、学校が開校されて記念運動会をする準備をしていた頃です。西村軍曹は小学校二、三年生の担任で運動会のけいこをやつているところだったですが、すぐ連絡をとつて彼はやめることにして、運動会までは見ているんですが、四、五日後にはもうアメリカの情報部が来たわけですよ。こちらは前もつて事情がわかっているから時間をかせぎながらすぐ西村軍曹とか敗残兵たちを集めて漁師を頼んで与論島に渡したんです。それから時間をかせぐために講堂に村民を集めて米軍の大歓迎をやつたわけです。

次の日アメリカは事情を察してすぐ追跡をやつたわけです。兵隊たちは永良部島でつかまつたそうです。それから時間をかせぐために講堂に村民を集めて米軍の大歓迎をやつたわけです。

それからしばらくして、また情報部がやってきて一騒ぎおこりました。今度はあの捕虜射殺のことでの來たわけです。仲田部落の人た

この兵隊たちがアメリカの捕虜を射殺したわけです。そのころ伊江島はアメリカに占領されて飛行場に使つてたわけで、日本軍の飛行機（特攻機）がくるのを防ぐために警戒飛行やつてるうちに、高射砲にうたれて伊是名城跡の西側の浜に墜落したわけです。その航空将校は落下傘で海に降りて、黄色いひとり乗りゴムボートにつて浜に漂着してきました。校長住宅の東側の方に診療所があります。そこに一応監禁したんです。あのときは空襲がひんぱんでアメリカの飛行機がとびまわつていましたが、それから二、三日たつたでようか、日本兵はその捕虜のために最後の晩さん会みたいなことをやつて、翌日は小雨のなかをそのアメリカ捕虜をひっぱつてまえに漂着した同じ場所へつれていきました。そこにはゴムボートがありますから、そこから送つてやると欺したわけです。こちらから見送りにいった人たちにも糧を持たせて、これはそのように偽装したわけです。送る船は向う側の浜にあるから、それをもつてくるあいだゴムボートに空気をいれなさいといって、相手がゴムボートに息を吹きこんでいるときに、銃で後から射殺したわけです。撃つたのは、菊池中尉とか馬場さん（軍曹）とか、他に四、五名の敗残兵たちです。

そのあとも奥間（国頭村）あたりから漂着した米兵がいましたが二人は前と同様の運命に逢つて、最後の二人は伊平屋に送つてあります。そのときはすでにアメリカは伊平屋に上陸してたわけです。アメリカがこの島にきたのは沖縄戦が終つてから、伊平屋の方から水陸両用戦車四、五台できました。伊平屋に墜落した日本兵も元気でこの島の兵隊と合流したわけです。この人たちはこちらの人たちが大騒ぎをしていました。

射殺したアメリカ捕虜は伊是名城の西側に埋めてありました。その場所を掘りかえすと遺骨が三体ありました。情報部はその遺骨と認識票など持ち帰つていきました。この捕虜殺害事件がどうなつたか、永良部で捕まつた日本兵がどうなつたかは何もわかりません。

無防備の島の戦争

伊是名村伊是名 東 江 正 勝（四九歳）

戦時体制

私は当時村會議員をやつておりました。議員は各字（部落）から一名ずつ出るのが慣例だったですから、私はこの伊是名部落の責任者でもあったわけです。

あるとき私は駐在に呼びだされ長いこと膝まづきさせられましたが、何のために呼ばれたのか、相手の巡査はただ黙つているだけですよ。当時は島には部隊がないから、戦闘訓練はこの「生良巡査、食糧の増産とか供出のことは県から派遣されてきた山川技手が権限をもつてます。村長とか議員といつても軍とか県の方針はこの二

人に指示してもらわないといかんです。この巡回はなかなかきびしい巡回でした。

私は「何かご用ですか」と言つたらすぐ膝まづきさせられて、「要求は何ですか」ときいても何も答えないです。「煙草をすつてもいいですか」ときくと「ならん」といつてどなるわけです。

巡回は私を罰するようになだ黙つて膝まづきさせているわけですが、私はうすうす察しがついていました。私はついこのまえ那覇に行ってきたんですよ。それで私の方から「私は那覇に行つてきたが何もしやべってはおらんですよ。私を糾すなら光明に調べてごらんなさい。いつたい、どんなわけで私をこんな目にあわすのですか」と言つても向うは口を開かんのですよ。それでも「あんたの好きなようにどうにでもしなさい。私はもう帰るから」とさっさと立つて帰つてきたんですよ。

実は当時島には無線があつて本島の様子ははいつてくるんですけど彼らがとめてしまつて村民には何も知らさんわけです。那覇あたりでは各家庭に防空壕など掘つて戦争に備えているのに、この島は食糧増産が大目標だと言つて、壕掘りやると畠仕事ができないからと言つてやらさんわけです。この島で防空壕を掘つたのは十・空襲でやられてあと、隣組で家の屋敷内に大急ぎで掘つたわけです。

増産した米は全部供出してモミは分散して蓄えてありました。牛も豚も供出して自分のものといつてはいけないですよ。少しずつは自分流のものを隠しはしておいたですがね。配給でもらえるのは玄米でほんの少しだけでした。家のなかまであつちこつちさがしてみんなもつていくから何ものこらんわけです。うちに小さい子供が五名い

ましたが毎日芋ばかり食べさせて、それでも足りなくて、表ダッチ一（米と麦を混ぜて炊いたもの）をつくつてやるんですが上の子などは全然食べなくて困つたですよ。昭和十八年ごろからはそういう状態になつていきました。

戦争がたけなわになつてからは供出米はモミのまま十か所ぐらいに個人の家に分散してあります。だが、壕など掘つてないもんだから、これが空襲で半分ぐらいは焼かれてしまつました。この米は船がなくなつて本島に出せなくてここに蓄えてあつたわけです。十・空襲で定期船がやられて、その後はクリ舟なんかで行き通いはしていましたがね。それから米は自由になつたわけですが農業組合長なんかがこれをおさえて村民には不自由を与えていたわけです。村では駐在とか農業組合長とか県の技手なんかが結んで島のことを指導していたわけです。巡回とか技手は上からの命令があるからこれが言うことは村長も聞かんといかんわけです。こういう戦時中の指導者たちが供出の食糧をおさえて民間にはやらないで自分たちは腹いっぱい食べていただけです。戦時体制ですから巡回なんかの権限は強くして彼が言うことは聞かないと大変だつたですよ。私は字の責任がありますからなんべんもケンカしましたよ。農耕一切のことは山川技手が指導していましたが年寄り連中はこの新らしい農耕法に批判的で私は板ばさみにあつて苦労したものです。

空襲がしばしばくるようになつてから村でも戦時体制を強化して防空壕や避難小屋をつくるようになりましたが、いっぱいでは村の防衛隊警防団をつくり、二十歳から四十歳までの男は全部編入され、訓練は竹槍を持って訓練したり、前の屋那覇島まで渡つて防空

空壕（陣地）を掘つたり、空襲の合間はバケツリレーで火を消すとか、部落一円で訓練をやっていました。敵が上陸したら竹槍で闘うという訓練でした。訓練は相当きびしかつたですよ。

微用

十・空襲後はわれわれも軍に協力しなければならないことになり、私も津嘉山に微用で行きました。金良、長堂の軍司令部の第二壕の作業です。二十年一月の初めごろです。すぐその後に、一月の二十三日の空襲にあつたわけです。行くときはまだ船の往き来はそんなに危険ではなくて、村で漁船を雇船して二〇〇名ぐらい一緒に行つたんですが、二十三日の空襲で島のことが心配になつて、婆さんのこと牛のことを考えると落ついていられないですよ。男たちはほとんど微用で出ていますから島は女子供だけです。

陣地構築隊の隊長は伊藤中尉だったですが、私は隊長のところへ行つて「伊藤さん、われわれは二週間の契約できたのにもう二十日にもなる。早く帰してください。われわれも空襲でこんなにやられたしこれは大変だ。子供らもどうなつてゐるかわからんし、あんたが帰さんと船も割られてどうなるかわからん。われわれは独断でも帰らなければなりませんよ」と言つたら、隊長はみんなを集めて、「伊是名の労務隊が協力してくれないと困る。われわれも満州からまた沖縄へやられて、くにには親もおり子もおる。國に対するご奉公はぜひともやつてもらわんといかん」と言つたんです。私は「ぼくはもういやだ。あんたたちとの契約は終つて一週間もよけいに協力しているんだから、ぼくはこれからは自由行動をとるから」と

言って、さつさと夜具をかついで浦添までは行つたわけです。浦添には従兄がいたからそこへ行つて食べ物をもらおうと思つたわけです。あの頃は島から微用に行くとき豚をつぶして各戸に二斤ずつ配給して、それで油味噌をつくりてブリキ罐に詰めてついて、軍から支給される芋なり飯なりにつけて食べてました。

浦添まで行つてそこから船で帰ろうと思つたんですが人もいないし船はもうないので奢えなおしてみようとした津嘉山にひつ返してきました。浦添から那覇へおりて、那覇から明治橋を渡つて嘉数を通つて金良、長堂についたわけです。帰つてくると軍では「ぜひ協力してくれ」とせがまれて百名（玉城村）までひっぱつていこうとするんですよ。われわれは「いや、協力はわれわれはやりますが契約期間を過ぎてまではできない」といつて断わつたんですよ。

その夜ちょうど諸見部落（伊是名村）の連中が山羊をつぶしていくのでどちらに呼ばれているか、そこへ軍から提灯をもつて使いがきて「東江さん、明日軍の方で〇〇方面につれていくので朝六時までに津嘉山駅へ集合しなさい」と言つてきたわけです。その夜はもう喜びがいっぱいで誰も寝ないで準備しましたよ。

朝暗いうちに歩きだして泥んこのなかをころんやりしながらとにかく六時には全員集合して軍用トラックに乗せられて津嘉山壕を後にしたわけです。

話は前後しますが、司令部壕は津嘉山から金良、長堂、真玉橋まで伸びていたようです。奥行きが深く、一〇〇メートルぐらい行く

と直角に曲ってサンガネ型になつてゐるわけです。あそこは土壘がシャーペルですからしばしば落盤にあつて死傷者も多く出たようですが、あの壠はぜんぶ徵用で掘つたものですよ。私は壠人口の搬装の作業でわりと楽な方でしたが、他町村の人たちは落盤事故などでいぶんやられています。陣地作業は各班に分かれてやっていました。

一月二十三日の空襲はその壠に避難しました。

「よいよ引揚げになって軍用トラックで名護まで運んでいかれたのですが、名護まで来ると班長がここで降りなさい」というわけです。

「班長さん、あんたは伊是名村長にわれわれを渡すという軍の命令ですよ。あんた、ここに村長はいるのか」とさくと、「私は知らぬい」という返事です。「あんたは村長のいる所まで届けないでわれわれをどうするつもりだ」となつてやつたんですよ。

「そんなことではあんたはタメにならんよ」「何がタメにならん

か」ということになつて、それで近くの司令部につれていつたら、

その隊長が沖縄出身の人で、それでこの班長はさんざん叱られた

ですよ。「村長のところまでつれていかないでどうするつもだ」と

いわれて班長は、「ガソリンがありません」と答えたもんだから、

「ガソリンが足りないガソリンは〇〇に軍としてちゃんとあるは

ずだ。足りなかつたら補給してすぐ〇〇までつれていきなさい」と

言つたわけです。当時軍では機密保持のうえから地名はすべてこん

なふうにマルマルと呼んでいました。

ガソリンを補給してから、本部渡久地までわれわれをつれていつたんですよ。ところが船はもうないんですね。そこで、本部半島の

南海岸の山入端に軍の舟艇が隠してあるといふのでそこまで引返し

ました。そこは海岸の岩が黒くゴツゴツしているので舟艇を隠すには都合のいいところです。そこまで行って運んでくれと頼んだわけですが、これはあっさり断わられました。泣く泣く本部までひつかえてきて山川村長の家に四、五日やつかりになつて、その間船をさがしました。

本部桃原に運搬船があるといふので、山川村長も同行して相談して、その夜のうちに船を出す約束で待機していたところ、ちょうどその時に日本の特攻機がやってきてアメリカの爆撃機に向つて二、三回パラパラとやつたと思つたら逆にすぐ撃ち落され、瀬底の北の海に落ちたんです。これを自撃した村民は、もう大変だ、これからは自由行動だと言つてバラバラになつたわけです。

私は当時金には不自由しなかつたから、ひとりで桃原の友達の家へ行つてクリ舟を雇つてもらつたんです。婆さん（妻）や子供たちの顔を見たさに一日も早く飛んで帰りたい気持でした。備瀬崎まで行つて交渉したところ、米の二斗、当時のお金が五円で相談はまとまりました。ところが海は荒れるし風は強くなるしでなかなか舟が出せないわけです。天氣を待つていてその船を雇おうと相談に來たわけです。よしそれにしよう、ときめて、私は備瀬から歩いて、残りは伊豆味まわりで今帰仁のウッパマに準まりました。その夜は船員たちがヤミ砂糖の取引きがあるからということでその夜は各自知り合いの家とか旅館などに分宿して、そして翌日の午後四時ごろまた集合してようやく船に乗ることになつたんですが、あいにく雨は降りだす

し風もでてくるし、どうしようかと思いながら、クリ舟で本船に通わすうちに時間はだんだんたつていくし、ちょうど伊是名の上空からB29がきて伊江島の上を通つていくんですよ。たぶん本土爆撃の帰りだつたんでしょうね。私たちはヒヤヒヤでしたが何ごともなく通り過ぎていきました。それでいよいよ船を出すことになつたわけです。

波は荒いし風は強いし、いつ何どき空襲に逢うかもわからない。

私はずっと船長の側に立ちどおしで「船長、しつかり頼みますよ。これだけの人間が乗っているんだから」とほげほげながらやつてきたわけです。ようやく日暮れごとに伊江島に着いたわけですが、当時の仲田港はすぐに船はつけられないもんだから小さいクリ舟で渡るわけですが、波は荒くて危いからと、荷物を持ってはならないと、体ひとつでようやく上陸できたわけです。その後には國頭のさきから伊江島あたりまで敵艦隊がすらっとあらわれていよいよ戦さが始まつたわけですから、私たちが島に着いたのは三月の二十日ごろだと思います。その前に、東部の人たちが軍の舟艇で還されてきたそうですが、全員伊是名の浜に上陸して船がひつ返そうとするところを空襲で沈められてしまつたそうです。私たちが最後の徵用引揚げだったわけです。

私たちの船でやつてきたのは一〇〇名ぐらいで、これには中学生や学校の先生なんかも乗つていきました。この船が本島との最後の連絡になつたわけです。私はそのときちょうど五十歳になつていました。

私はようやく島へ帰つてきて命びろいしたと思ったら三日目からは裏山へ行つて防空壕掘りです。松の木を伐採して、穴を掘つてその上に渡していただら、土もかぶせないうちに戦さは始まつたわけです。壠作業がはじまつて二日目、國頭から伊江島まで軍艦が並んだわけです。すると、仲田部落なんかではないよ日本の艦隊が動きだしたと思って、みんな浜に出てバンザイ、バンザイと喜んでいました。ところが、そこへ日本の特攻隊がやつてきて、仲田の沖で艦隊につつこんでいったんです。そのとき軍艦二隻がやられたと思いますが、それから「これは友軍じゃない、アメリカ艦隊だ」と言つてみんな山の中へ逃げだしてしまつたんですよ。二十三日ごろから空襲がはじまつて、二、三日すると伊江島に艦砲がはじまつたんですよ。私は、婆さんと子供らは山の壠ににがして、私は最後まで屋敷の壠にのこつていたんですが、伊江島の方でドローンドローンと艦砲の音が聞こえてきて、恐くもあるからどうしようかと思つていると、空襲がはじまつて激しくなつてくるし、とうとう部落の中には居られなくなつて三日目に山へ逃げていきました。家には牛も飼つていましたがそれもそのままで、時蔵してあつたモミもおおかた焼かれてしまつました。

それからはずつと山の中の壠で避難生活をしていましたが、戦争中も畑仕事はずっとやつておりました。山川技手とか生良巡査はいつもとはきつかたが食糧増産には熱心に督励しました。「戦さよりは戦後の食糧難がこわいからみんな増産をやりなさい」と言つて、稻の種播きをやらせて植え付けは夜植えました。アメリカの

飛行機は夜も飛んでくるので、そのときは畠に伏せたりしながら仕事を続けたものです。この年は台風もこなくて、おかげで一期作は豊作になりました。これが戦後の食糧難の時期に本部、羽地、今帰仁あたりへクリ舟で運ばれていて避難民の衣類と物々交換されてお互いに助かつたわけです。

屋間は海の上で戦闘が行われるのを壕の中からこわごわ見ていました。六月の初め、伊平屋島に艦砲がドンドン落ちるのを私は学校の裏山で見張りをやっておりました。弾は島を越えて裏の海にボンボン落ちていったのです。そのとき、私は集まって、もしこの島に上陸してたらどうするかと相談したわけです。そこで、アメリカは民間人は絶対殺さないはずだから、白旗をあげて降参すれば大丈夫だと言い聞かせて、どこから戦車がきてもの白旗で歓迎しようということにしたわけです。なかには反対する者もいました。友軍にみつかつたらやられると言っているんですよ。結局、白旗を用意することになつたんですが、さて、この旗をどうやってつくろうかと問題になつたわけです。あのころ伊是名で蒲団カバーをもつているのは二、三軒しかなかつたですよ。私のも提供してこれで白旗を用意して各部落に配つておいたわけです。その他に、先生方など公職者はみんな本島に行つてしまつたと答えること、女はボロを着けてなるべく汚く見せること、なども相談しておきました。

特攻・敗残兵

この前の海にはアメリカの軍艦がずらつと並んでいました。そこへ日本の特攻機がどんどんやつてきました。行くけれども、向うの

高射砲はドロンドロンと網みたいに撃つてくるからめったに近づけないです。特攻機は北の方から海スレスレに飛んできることで敵にぶつかるわけです。なかなかそれから南へは飛んでいけないのですよ。ここらあたりで突つこんでいつても命中する飛行機はめったにないです。あの高射砲にはかなわないですね。

アメリカの艦隊は、後になると小型艦は残波岬（読谷村）方面に逃げていって、ここに残つたのは三万トン以上の軍艦が二隻こちらをうろついていました。夜は沖の方にしりぞいていて、屋はやつてきて今帰仁に、伊江島方面に艦砲を撃つていました。私は西の山の防空壕の近くにいて、アダン（阿旦樹）の下にかくれて伊江島が砲爆撃されるのを毎日眺めていました。

この二隻の軍艦は、ずっと後になつてからですが、とうとう二隻とも撃沈させたですね。伊江島と屋那都島の間の海でした。

この伊是名部落の近くに特攻機が不時着したことがありました。私が夕方近く壕から家へ帰るうとするとすぐその前の海岸に友軍の飛行機が一機逆さになつてつっこんでいるんですよ。おかしいな、と思って部落に帰つて他の人に様子をみにやつたら、飛行機の下から「友軍だ、助けてくれ」と叫んでいたそうです。すぐに生良巡查に連絡して救助しました。そこは干潮で浅瀬になっているところでした。満潮だったら助からなかつたでしょうね。飛行機は小型一人乗りで爆弾をかかえたままでした。敵機に追われているうちにガソリンが切れて急にここに突つこんできたそうです。この搭乗兵は部落で手厚くもてなしをしています。

本部半島から逃げてきた敗残兵もたくさんこの島に来て部落の各

家に分散して世話をしておりました。私の家であづかったのはシゲノブ軍曹という鹿児島出身の人でしたが、ほかに東京出身の伊藤中尉、ほか七名の兵隊たちがいました。この敗残兵たちは読谷の工兵隊だと言つっていましたが、ここまで来るまでには大変な目に逢つたようです。読谷から逃げてしばらくは恩納山にかくれていたが、それから恩納の浜からクリ舟をだして瀬底島に渡り、そこの自然壕に二、三日ばかり隠れていたようです。それから先是、伊江島も本部半島も占領されているから、伊江島と備瀬崎の海峡はアメリカの軍艦が停泊しだおしで、昔の関所みたいなつていいるわけです。危険なもんだから二、三日隠れていたらしい。はじめのうちは島の婦人会などが幸など持つてきただらうが、後になると青年会の連中から抗議がきて、こんな者をかくしておくとこの島が大変なことになると言つて追いだしにかかつたわけです。そこで、島に片手をダイナマイトでやられた年とった漁師がいて、この爺さんが大型の漁船を提供して、この船で逃げてくれと言つてきたそうです。この船は普通のクリ舟を三隻ばかり板合せにした大きさがありましたね。この船で動けるものではない。やつと日が暮れてきたので、さあ逃げようといふことになつて、船に毛布の帆を張つてしまつすぐこの島へ向つて脱出してきたわけです。ギタラ（東南海岸の地名）のところにたどりついて船をあげてあるところを薪取りに行って伊是名部落の連中がみつけたわけです。

この九名の敗残兵がきたことは、村ではアメリカ村長（米軍から任命された臨時の村長）がいる頃だし、旧の七月十六日（新暦八月三日）でお盆のころだと記憶していますから、後で考えると戦争はもう終つていただけですが、私は本島ではまだ戦つてゐるときかと思いませんでした。この敗残兵たちがそんな話をするわけです。われわれは軍の使命をもつて早く与論、永良部（沖永良部）へ渡らんといかん、それまでここでやつかいになるから」と言つていました。この島の人は正直ですから、誰も敗残兵とは思つてないわけです。この人たちが早く行けばそれだけ日本は勝つと思って、婦人会は毎日炊き出しをやつて暗いをやり、私などは船の準備をやつたわけです。ここには糸満の漁師で上原という人が住みついていましたから、彼に帆と帆柱を提供させました。

おもしろいことに、この敗残兵のうちいちばん階級が高いのは伊藤中尉ですが、実際はシゲノブ軍曹が牛耳つていました。彼は年齢も上だし、戦前はカツオ船で伊平屋の沖まで来たこともあるそうで、海には詳しくて、自然にリーダーになったと思います。

いよいよ準備ができて出発という日に、四か部落の婦人会が西瓜とか握り飯とか四、五日分の食糧を集めてきて船に積みこみました。私は帆のあやつり方とか船の取り方とか航路のことまで教えて練習までさせました。ところが、この時になつて、他の家に分宿した四名の兵隊がマラリア熱で倒れて動けないとわかつたんです。この島にもともとマラリアはありませんから本島からもつてきただと思います。「自分らはマラリアで行けんから」と病人はことわつたです。が、シゲノブ軍曹は「おまえらをここに置いておくと秘密

がバレるから、残すわけにはいかん」と言つて無理に船にのせてしましました。後で島の人たちは「伊平屋島あたりで海にはおりこんだのではないか」と噂をしていました。

ここから内地に行くには与論島をめざして真直ぐ行けばよいわけです。そこまでいけば沖永良部島が見えるからまたそこからまたそこへ向つて島つたいに行けばよいわけです。そんなことを教えて別れようとして、伊藤中尉が私に「これは記念に取つておけ」と言って自分の軍刀を私にくれようとするわけです。私は「よろしい。あんたの志は感謝するが、これは軍人の身を守る道具だし、私には入用のない道具だから最後まで持つておきなさい」と言つてことわりました。

その夜は満月で、風も順調だったから夕方になると船を出しました。結局沖永良部までは無事脱出できたとききました。この後になってから私たちには日本が敗けたということを知つたのですが、この兵隊たちは捕虜になるのが恐くて逃げていったのだと思います。その後は彼らから何の連絡もきません。

米軍上陸

六月の初め、伊平屋島に米軍が上陸したときは、警備船(哨戒艇)は内花(伊是名島北端)と具志川(島)の間を往き来して今にも上陸してくる模様でした。このとき、名嘉徳盛という青年が野甫(島)から伊平屋に泳いでいて、この島には軍事施設は何もないから攻撃しないでくれと米軍に頼んで、それが聞きいられられてこの島は救われたわけです。この名嘉青年は諸見部落から野甫島に養子に行つたわけですが、そのまんなかの伊是名だけは何ともなかつたわけです。

十・十空襲で那綱は全滅したといわれますが、伊是名では初めは何も知らなくて、学校は普通どおり授業をやつていて、三時限目でしたか、教員のひとが上空から真白い飛行機が飛んでいくのを見たというんですよ。見なれない飛行機ですなあと話し合つていたんですが、誰も気にもとめなかつたんです。昼飯もすましてから、艦載機が低空ってきてパラパラやりだしたわけです。それでも友軍の演習だらうと思つて、教員も生徒たちも危険を感じないんですね。私は体育の授業をしながら見ていたんですよ。艦載機は港をねらつているわけです。ちょうど村有船が荷役の関係で仲田港にいたんです。それを低空で機銃掃射していくもんですから学校の辺りにも弾がどんどんくるんです。やつて敵だと思つて、子供たちを教室の机の下に退避させたわけです。校庭の道一つへだてた崖に二五〇キロ爆弾が一個おとされました。さいわいこれが不発だったから犠牲者を出さずにすみました。機銃弾は校舎にピスズアつていますが生徒は無事でした。飛行機が飛び去つてから、生徒をつれて、それから山へ避難したわけです。全生徒を収容する壕も用意してないですから山の中にはばらばらに隠れているだけです。それまで軍からの命令も何もないですから何の危険感もなかつたんですが、十・十空襲あとには大変だということで学校は休みにして、教員だけが御真影と「勅語」を守っていました。この御真影はあとで仲本校長が悲壮の覚悟で本島に運んで、山の中で焼いたとか言つて帰つてきました。

ていたわけですが、海外移民がえりで、知恵も勇氣もある青年でした。そういうわけで、伊平屋が占領されてもこの島はほつたらかされていたのですが、しばらくして、突然、この伊是名と内花に水陸両用戦車がそれぞれ五、六台上陸してきたんです。これは伊平屋からきたマリン隊です。びっくりしましたよ、誰が海から戦車がやってくると想うものですか。恐くもあるし見たくもあるし、たちまち島じゅう大騒動になつてしましました。女たちは恐がつて、わざとボロをつけたり顔に鍋ズミを塗つたりして出てきましたが、なかには若い娘など、山の中の壕に逃げたり天井裏に隠れたりしたのもいました。それでも強姦事件が一件ほどあつたように聞きました。上陸部隊は部落民を一か所に集めて怪しい人物はいないかと検分したわけですが、異常はないとかつて、それで本島の方へ移つていました。さきほどの敗残兵はその後にこの島に来たわけです。

戦時下的国民学校

伊是名村諸見 仲 田 栄 光

伊是名は空襲で少しやられただけで艦砲も受けませんし戦闘もありませんでしたよ。この島には部隊がいなかつたですからね。しかし、同じように部隊もなかつた隣りの伊平屋には米軍が上陸していますよ。南の伊江島は飛行場があつたからまつさきにやられるし、伊平屋は空襲、艦砲でたたかれあと何万という戦闘部隊が上陸しました。それでも強姦事件が一件ほどあつたように聞きました。

伊是名は空襲で少しやられただけで艦砲も受けませんし戦闘もありませんでしたよ。この島には部隊がいなかつたですからね。しかし、同じように部隊もなかつた隣りの伊平屋には米軍が上陸していますよ。南の伊江島は飛行場があつたからまつさきにやられるし、伊平屋は空襲、艦砲でたたかれあと何万という戦闘部隊が上陸しました。それでも強姦事件が一件ほどあつたように聞きました。上陸部隊は部落民を一か所に集めて怪しい人物はいないかと検分したわけですが、異常はないとかつて、それで本島の方へ移つていました。さきほどの敗残兵はその後にこの島に来たわけです。

島 자체としては食糧はふんだんよりはかえつてごちそうをしていました。戦さがどうなるかという不安はあるにはありました、本島の様子がぜんぜんわからないですから敗けるとは思いませんでしたよ。伊是名部落で空襲で三〇戸ばかりやられたときは各部落に割り当てて共同作業でカヤぶきの家をすぐ建てました。崖は山へ逃げて夜は部落へ帰つてめいめい豚を殺してごちそうしたものでした。夜陰に乘じて稻を植えたり芋掘りをしたりして、金はなくとも食える島ですから、命をつなぐうえでは農村は強いものです。田畑のない教員たちも各部落でめんどうをみて生活に困ることはありませんでしたよ。ただ、山の中の生活は不潔で健康を害するものでした。

そのうち六月三日に伊平屋島に米軍が上陸してきました。私たちは山の上から眺めていましたが、あの細長い島に艦砲が猛烈にうち

こまれて、なかには島をとびこえて反対側(西側)の海に落ちていくもあるんですよ。後で話しあくと、上陸した海兵隊の上に艦砲が落ちて同士討ちになつたこともあつたそうです。この島からは青年が泳いでいて伊是名には部隊はいなから攻撃しないでくれと伝えたそうです。それでこの島には何ともなかつたんですが終戦になつてから伊是名にアメリカがやつてくることになつたんです。このときは村じゅう大騒ぎして、みんな殺されるか強姦されると思って、女たちはボロをまとめて顔にスミを塗つたりして出てきたわけです。こんな小っぽな島で逃げるところもないから殺されるときは皆いつしょに殺されようと、一か所に集まつっていました。

とくに、教員は殺されるとかいう噂が流れ、家にある教科書がみつかつたら大変だとこれを埋めたりして、村じゅうに私たちの身分を言つてはいけないと口どめして、生徒にも村民にも名前の呼び方を○○先生といつてはいけない、○○ねえさんとか、○○おばさんと呼ぶようになると教えて、それで今でも○○おばさんと呼ばれている女教師もいます。学校の教員は全部他府県人だったと答えるようにしたわけです。

米軍は舟艇で伊是名部落に上陸しましたが、遊びに来たようなもので何の攻撃もしませんでした。これをきつかけに村長も仲田喜盛さんが任命され、これを島ではアメリカ村長と呼んでいましたが、この村長の役目は米軍の配給日を知らせ、レーションとか野戦服などを各部落の区長に分配することでした。

学校は十・十空襲以後休校になつたままでしたが、米軍が上陸してきてから八月ごろ、若い先生たちが言いだして自主的に開校しま

した。校長も自分らで選んで、戦前の主席訓導の大城政秀先生を校長にしました。またそのころは本島との連絡もないし教科書なども処分してしまつて、教科書なしで思い思いの授業をやつしていました。学校の給与は配給品から現物を給付することにして、二部授業でしたがとにかく学校が再開されたわけです。やがて民選村長になり、校長も村長の委嘱という形になり、本島の方から昭和二十一年の初めごろ「文教時報」第一号が届いて、それから形のととのつた戦後の民主主義教育が始まつたわけです。

△資料▽
申立書

名 嘉 喜 扶 (明治四三年三月二二日生)

本村は沖縄西北端に位置する離島で昭和十九年二月頃より国家総動員法に基き六十歳以下十七歳までの男子の可働者は軍の命令により数回にわたり伊江村の飛行場建設に徴用され同年十月上旬より昭和二十年二月中旬までは沖縄南部地区(豊見城、南風原、東風平の各村)に軍防空壕その他施設に徴用されましたが、一方村内でも軍司令部の命に依り防衛隊が組織され対空監視と防衛訓練に専念せしめ自主防衛の態勢を強化しつつありました。

昭和十九年十月十日の沖縄最初の空襲に三人の村初めての犠牲者をだし当時の村長であつた私は兵事主任を伴い沖縄連隊区司令部に軍隊の駐屯並に兵器の配布を要請したが容れられずあくまで自主防

衛を強制されました。

同十一月上旬頃沖縄本島より夜間クリー舟から二人の青年が強行渡島し宮城、西村の両教師が赴任してきた。間もなく宮城氏は伊平屋村に移動しその後二人はたゞ連絡を密にし両村の防衛を指導していました。伊是名村は西村教師と防衛隊長、警察官が防衛の指導指揮にあたり島内の対空監視と防衛に努めさせていましたが戦況は一段と悪化し昭和二十年一月三十日午後三時頃十数機の敵機編隊は伊

是名部落に設置せる伊是名無線局と防空監視所を目標として爆撃を行ない同日監視勤務について伊是名分隊長故名嘉喜扶は監視所を爆撃する爆弾の破片で頭部顔面を切断され即死しました。この空襲で死者六名負傷者十余名家屋十数軒が破壊され伊是名村最大の損害を蒙りました。これまで情報傍受していた無線機も破壊されその機能も失つた。

また、昭和二十年二月上旬には西村教師が秘密に持ち込んだ多量の手榴弾をして斬込隊を編成し敵の上陸に備えていた。かくして、その後二、三の空襲に見舞われ漸く終戦になり援護法が制定され戦傷病死者遺族援護事務が再開されるやたまたま遺族からの申出もあつて昭和三十三年十二月戦闘参加の申立の際も当時の防衛隊長と連名で事実を上申しましたが法の適用を受けられず現在にいたつています。私達は当時の職責を感じ一日も早く遺族が國家の恩恵に浴するべく申立を致します。なお、西村、宮城の両教師は共に英語、シンガポールの達人で終戦になつて初めて軍司令部直属の特務機関の軍人であったことを知りました。

西村氏は本名を馬場(鹿児島出身)宮城氏は斎藤(東京都出身)で斎藤氏は現在東京芸術大学特殊学科の講師をしていると聞いてい

ます。

当時、直接関係のあつた私達連署し上記の通り事実を申立てさせて公的記録にかかるべく証明致します。

昭和四十六年五月二十五日

当時の村長

伊礼穆明

当時の防衛隊長

末吉久藏

当時の兵事主任

城間久栄

現 認 証 明

名 嘉 喜 扶

故名嘉喜扶は昭和十九年二月頃伊是名村防衛隊並に航空監視隊伊是名分隊長として隊員十八人と共に対空監視防衛に努めていました。

昭和二十年一月三十日名嘉さんと仲田喜盛さん私の三人は当日の対空監視に当つていましたが午前十一時頃沖縄方面空襲警報発令と本部からの連絡がはいつたので監視台にいた名嘉さんがサイレンを鳴らした。警戒警報なしの空襲警報に隊員はすぐに監視所に集まり分隊長名嘉さんの指示を受け配置につきました。

午後三時頃監視台に見張っていた仲田さんが敵機らしい編隊が国頭上空よりこちらに飛向して来ると報告してきたので詰所に居た名嘉さんはすぐさま外出した。私も名嘉さんの後についた。その時飛行機の爆音が大きく聞こえたかと思うと監視台からころがるように

して降りてきた仲田さんが敵機来襲と叫んだので私達はその場に伏せた。とたん轟音と共に爆弾が炸裂した。一瞬にして付近一帯爆煙に包まれ私は煙の中をどうして退避壕まで逃げたか知らなかつた。半時間ほどして空襲は終りしばらくして少し落書きを取り戻したのもとのところへ行ってみたら名嘉さんが顔面から血に染つて倒れているところを見た。抱き起こしてみたがすでに息をひきとつていました。そのうち四、五人の隊員が來たので名嘉さんの妻カメさんの居る防空壕に連絡しカメさんを呼んだ。葬儀について話し合い、住家が破壊されているので兄の家に遺体を移しそこから葬式をするとかカメさんの実家からるとか等一時はとまどつたが遺族との相談の結果潰された名嘉さんの住家あとに露天をしのぐ仮小屋を建てそそから葬式を行うことになり遺体を移し遺族と隊員だけで葬式を終り帰る頃は夕闇が迫っていました。夫と住家を失った妻カメさんは涙の明け暮れでした。

被害は監視所を中心に名嘉さんの家屋をはじめ一〇軒余りが爆破されました。

上記の通り確認し証明致します。

昭和四六年五月二十五日

当時の防空監視隊員

末 吉 龜 吉 @

伊

江

島